

令和 2 年度
公立高等学校入学者選抜

問 題

国 語

(第 1 時 9 : 05 ~ 9 : 55)

第一問 次の問いに答えなさい。

問一 次の文の——線部①～⑧のうち、漢字の部分はその読み方をひらがなで書き、カタカナの部分は漢字に改めなさい。

・ 夕食までの時間を読書に費やす①。

・ 洋服の破れを繕う②。

・ 傾斜③が急な坂道を登る。

・ 主役を演じた役者が喝采④を浴びる。

・ 庭にある木のミキ⑤の太さを測る。

・ 鳥が海に向こうへト⑥んでいく。

・ アン⑦イに判断しないように心がける。

・ 大臣が諸外国をレキ⑧ホウする。

問二 熟語の構成が「予定」と同じものとして、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 仮眠 イ 着席 ウ 尊敬 エ 雷鳴

問三 次の行書で書かれた漢字を楷書で書いたとき、総画数が最も多いものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 銅 イ 種 ウ 潮 エ 磁

問四 中学校の生徒会の会長に立候補したAさんは、立会演説会に向けて演説の練習を行い、それを聞いていたBさんからアドバイスをもらいました。次は、Aさんの「演説の練習」と、AさんとBさんの「練習後の会話」です。あとの(一)～(五)の問いに答えなさい。

【演説の練習】

私は、二年一組のAです。どうぞよろしくお願いします。

私が生徒会長に立候補した理由は、この学校を、互いに協力し合う、笑顔あふれる学校にしたいと考えたからです。私はこれまで、「心に決めた目標を変えることなく最後までやり通す」ことをモットーに、何事にも取り組んできました。私は、生徒会長になって皆さんのために、自分の力を発揮したいと思います。

さて、互いに協力し合う、笑顔あふれる学校にするために、私が生徒会長になって取り組みたいことは、「あいさつ運動」を充実させることです。現在、生徒会執行部と生活委員会の活動として、週に一回、昇降口前で「あいさつ運動」を実施しています。「あいさつ運動」によって、休み時間や放課後でも元氣よく挨拶が交わされるようになり、学校が明るい雰囲気になってきました。

そこで、「あいさつ運動」を充実させるために、私が実現したいこととして、学校の近くの商店街や近隣の小学校の前で実施すること、生徒会執行部と生活委員会だけが行うのではなく、生活委員を中心として、クラスごとに当番を決めて行うことを考えました。

これにより、学校全体で「あいさつ運動」に取り組むことになるので、「互いに協力し合う」ことができ、そのうえ、本校が元氣よく挨拶をする「笑顔あふれる学校」になるだけでなく、あふれる笑顔を地域にも広げていくことができると思います。これらのことを実現するのは簡単ではないかもしれませんが、^①たとえ実現するのが難しいので、あきらめずに最後まで努力したいと思います。どうか皆さん、私に一票をお願いします。

【練習後の会話】

〈Aさん〉 聞いていてどうだったかな。話し方について、何か気づいたことはあったかな。

〈Bさん〉 そうだね。演説にかかった時間は、ちょうどいいくらいだったよ。それと、今は二人だけで練習しているけれど、当日は、立会演説会という場に合った話し方を心がけるといいね。

〈Aさん〉 では、話し方を工夫してみるよ。他にもあるかな。

〈Bさん〉 Aさんのモットーについてだけれど、同じような意味を表す四字熟語があったよ。四字熟語を使ったほうが、強い印象を与えると思うよ。

〈Aさん〉 うん。それは「③」という四字熟語だよ。確かに、そのほうがいいね。演説の内容についてはどうだったかな。

〈Bさん〉 特に気になったのは、「あいさつ運動」を充実させるために実現したいことについてだね。その直前に話していた、現在の「あいさつ運動」の話からは、すんなりつながらないように感じたよ。もう少し説明が必要じゃないかな。

〈Aさん〉 うーん。言われてみるとそのとおりだね。当日までに、実現したいことについての説明をよく考えて、説得力を高められるようにするよ。

〈Bさん〉 そのほうがいいよ。Aさんが実現したいことは、聞き手にとって最も知りたい情報だからね。ただ、さっきの練習を聞いていたときは、伝えたいことがどういふことなのか、よく分からないなと思っただよ。実現したいことがいくつあるのか、それはどういふ内容なのか分かりやすく述べられると、いいと思うよ。

〈Aさん〉 なるほど。⑤その部分も聞き手にとって分かりやすくなるように直してみるよ。

〈Bさん〉 そうだね。Aさんの思いが、みんなに伝わるといいね。

(一) 【演説の練習】の中に「たとえ実現するのが難しいので」とありますが、適切な表現になるように、「難しいので」の部分を、**五字**で直してください。

(二) 【練習後の会話】の中に「立会演説会という場に合った話し方」とありますが、その話し方として、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 全校生徒に話すので、間違わないように原稿から目を離さずに読む。
- イ 広い会場で話すので、よく聞き取れるようにはつきりと発音する。
- ウ 生徒に向かって話すので、親近感が湧くように丁寧語を使わない。
- エ 他の立候補者と競うので、印象に残るようになるべく早口で話す。

(三) 【練習後の会話】の中の③にあてはまる言葉として、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 謹厳実直
- イ 心機一転
- ウ 大器晩成
- エ 初志貫徹

(四) 【練習後の会話】の中の「特に気になったのは、」で始まる発言は、どのような観点に基づく指摘ですか。その説明として、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 話が論理的であるかどうかという観点に基づいて、Aさんが実現したいことを考えた根拠が明確に述べられていないという指摘。
- イ 事実と考えを区別して話しているかどうかという観点に基づいて、「あいさつ運動」の成果に事実が含まれていないという指摘。
- ウ 聞き手が理解しやすい表現になっているかどうかという観点に基づいて、Aさんが実現したいことの説明が具体的ではないという指摘。
- エ 話題を提示する際に聞き手に伝わりやすい工夫があるかどうかという観点に基づいて、資料を用いて説明したほうがよいという指摘。

(五) 【練習後の会話】の中に、⑤その部分も聞き手にとって分かりやすくなるように直してみるよ。」とありますが、次の文章は、AさんがBさんのアドバイスに基づいて、【演説の練習】の中の⑤の部分直したものです。⑤に入る適切な表現を考えて、**十五字以内**で答えなさい。

そこで、「あいさつ運動」を充実させるために、私が⑤。一つ目は、「あいさつ運動」を、学校の近くの商店街や近隣の小学校の前で実施することです。二つ目は、「あいさつ運動」を、生徒会執行部と生活委員会だけが行うのではなく、生活委員会を中心として、クラスごとに当番を決めて行うことです。

第二問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「私」(飯田)は、十五年前の小学六年生のときに、クラスで「三十人三十一脚」の大会に参加し、自分が転倒したせいで敗退したことで、練習中は隣で優しく支えてくれていた奥山が、大会を境によそよそしくなったことを、ずっと気に病んできた。「私」は意を決して同窓会に出席し、奥山に転倒したことをわびた。

「あ、あの、ほんとにごめんね、今さら。聞いてくれてありがとう。じゃ……」
言うだけ言って逃げようとした私を制するように、そのとき、奥山くんがぬっと掌を突きだし、張りつめた声を響かせた。

「触って」
「え」

「触ってみて」
血色のいい大きな掌。触って？ 意味がわからず瞳で問うも、奥山くんは「文字に結んだ口を動かさない。どうやらそのままの意味らしい。」

① 私はこくりと息を呑み、震える手をさしのべた。人差し指と中指、二本の指先でそっと眼下の掌に触れる。ぬめりとした。

「濡れてるでしょ」

「はい？」

「汗っかきなんだ」

「え」

「とくに、緊張するとすぐ汗が出て」

「あ……」

「今ならふつうに言えるけど、子どものころはすっごく、それが恥ずかしくて。どうしても、だれにも、知られたくなくて」

声をなくした私の前で、あいかわらず白い奥山くんの首筋がみるみる赤く染まっていく。

「あの日……あの予選の日も、ぼくの手、汗でびっしょりだった。気がつかなかった？」

問われて、ハッと息をつめた。あの日。スタートラインで肩と肩を組み合わせた瞬間の、奥山くんの掌。いつもよりそっけなく感じた記憶はある。感触は？ 思いだせない。首を横にふった。

「そんな余裕なくて」

「すごい汗だったんだ、緊張して、あのムードにやられちゃって。紐を結ぶときも、腕を組むときも、バレたらどうしようって、すごくびくびくしてて。」

飯田さんが転んだとき、あれが絶頂だった。ぼくのせいだ、ぼくが汗ばっか気にしてたからだってパニックって、ますます手がびしょびしょになって……」

② 「ごめん、と奥山くんが悲痛な声とともに低頭する。」

「その濡れた手を、どうしても、飯田さんに、さしだせなかった」
「……………」

時間が止まった。時がもどった。十五年前のあの日、地べたに転がる私を無表情に見下ろしていた奥山くん。どうして気づいただろう。そのこぶしが大量の汗を抱いていたなんて。いつも冷静で、おだやかで、大人びていたあの男の子が、それほどの重圧に震えていたなんて。

子どもだったんだ。ふいに、その当然の事実がすとんと胸に落ちた。奥山くんも、私も、もしかしたら真梨江先生も、あのころはみんなまだ本当に子どもだったんだ……。

「あれからぼく、飯田さんの顔、とてもじゃないけどまともに見られなくて、謝る勇気もないまま卒業しちゃって、それが、なんていうか、ずっとこのへんに引つかかって……」

このへん、と奥山くんのこぶしが鳩尾のあたりを叩いた瞬間、はじかれたように私の涙腺がゆるみ、彼の背後にうかぶ上弦の月がほやけた。

「だから今日、飯田さんと話ができてよかった。ほんとによかった」

「奥山くん……」

「SPやっていると、どうしてもあの日のことを思いだすんだ。どんな要人守っても、セレブ守っても、クラスメイトの女子一人守れなかったら、ただのボンコツだなんて」

十五年間、私とおなじ重さを負ってきてくれた元パートナー。その肩からようやく力がぬけて、なつかしい観音の笑みもどった。

私も――。目の縁ぎりぎりに涙を押し留めながら、私は声にならない声を返した。私もずっとあの日に捕らわれつづけてきた。ことあるごとに自ら傷口をえぐり、そして、弱気になっていた。どうせまた私は失敗する。自分のせいでみんなに迷惑をかける。悪いほうへ悪いほうへと考えては怖じけてしりごみし、心の弱さをぜんぶあの転倒のせいにして、結局のところ、臆病な自分を甘やかしつづけていた。

「私も、話ができてよかった。今日、ここにきて本当によかった」
ほめていく。自らの手でこじらせていた紐のむすびめが解けていく。

「ありがとう」

④ 地を踏み足の軽さにふらつきながらも、初めて自分から奥山くんの手をさしのべた。

「こちらこそ、ありがとう」

再びつなぎあわせれた手。それだけで十分だった。ためらいなく握手をしてくれた彼の濡れた掌に、十五年前の真実が宿っている。

理解しあうために必要な年月もある。人は、生きるほどに必ずしも過去から遠のいていくのではなく、時を経ることで初めて立ち返れる場所もあるの

だと、触れあった指先にはのかな熱を感じながら思った。
(森 絵都「出会いなおし」による)

*をつけた語句の△注▽

パニックって——頭の中が混乱して。
真梨江先生——当時の担任の先生。
鳩尾——胸骨の下にあるくぼんだ所。
SP——要人の警護に当たるとる私服の警官。
観音の笑み——ここでは、仏像のように穏やかな笑顔のこと。

問一 本文中に「私はくりと息を呑み、震える手をさしのべた。」とありますが、このときの「私」の心情を説明したものととして、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 奥山の覚悟を感じ取り、気持ちを通じたことに感動している。
- イ 奥山の意図が理解できず、何が起きるのかと困惑している。
- ウ 奥山に弱気な姿を見せまいとして、気持ちが高ぶっている。
- エ 奥山の態度があまりに高圧的なので、怒りを感じている。

問二 本文中に「ごめん、と奥山くんが悲痛な声とともに低頭する。」とありますが、次の文は、奥山が「私」に謝りたいと思っていたことについて説明したものです。
三十文字以内で説明しなさい。

精神状態がとて混乱する中、
「私」に、濡れた手をさしだせませんでしたこと。
ので、転倒した

問三 本文中に「私の涙腺がゆるみ」とありますが、次の対話は、このことについて話し合ったものです。あとの(一)、(二)の問いに答えなさい。

〈Xさん〉 「私の涙腺がゆるみ」とあるけれど、「私」はどうして涙がにじんだのかな。
〈Yさん〉 それは、奥山が「ずっとこのへんに引っかかって……」と

言って、鳩尾のあたりを叩いたことよって起こっているね。
「私」はこの言動から何かを感じ取ったので、涙がにじんだのだろうか。

〈Xさん〉 そうだね。奥山のその言動は、「私」に謝ることができなかった後悔が心に引っかかっていて、その状態が十五年もの間続いてきたということの意味していると思うんだ。
〈Yさん〉 うん。奥山の後悔が、SPになった今の生活にまで影響していることは、その後の「どうしてもあの日のことを思いだす」という言葉からも分かるからね。そして奥山は、転倒のときの対応のまずさを振り返っては、自分を **A** きたんだね。
〈Xさん〉 そう考えると、涙がにじんだときに、「私」が奥山の言動から感じ取ったのは、これまで苦しんできたのは「私」だけではなかったということかもしれないね。だから「私」は、奥山に対して、「**B**」と感じたんだろうね。

(一) **A** に入る適切な表現を考えて、五字以内で答えなさい。

(二) **B** にあてはまる言葉を、本文中から十六字でそのまま抜き出して、はじめの五字で答えなさい。

問四 本文中に「初めて自分から奥山くんに手をさしのべた。」とありますが、このときの「私」の気持ちを、五十五字以内で説明しなさい。

問五 本文中の~~~~線部の表現について説明したものととして、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「血色のいい大きな掌。」という体言止めの技法によって、文章に畳みかけるようなリズムを与えている。
- イ 「びしょびしょ」という擬態語によって、様子をあえて不明瞭に伝え、読み手の関心をかき立てている。
- ウ 「上弦の月がほやけた」という情景描写によって、時間が経過していることを暗示している。
- エ 「紐のむすびめが解けていく」という隠喩によって、たとえられているものの状態を印象づけている。

第三 問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

抽象は、英語ではアブストラクト。つまり抽出だ。自然からエッセンスを抽出するのが、抽象表現であり、それこそが芸術の本質である、ということだろう。古典的な芸術論では、芸術は自然の模倣であるとされていたが、むしろ自然からの抽出というべきものかもしれない。

*クレールは「芸術の本質は、見えるものをそのまま再現するのではなく、見えるようにすることにある」ともいっている。抽出することで、人に見えないものを見えるようにすることができるといえる。

勤務先の大学にできた「基礎美術」コースで、いけ花の珠寶さんのお献花を見学した。

珠寶さんが花器の前に座って一礼した瞬間、準備でがやがやしていた空気がすっとひきしまった。①思わず自分の背筋も伸びる。

ヒノキを真に据えようと、ツツジやフジ、そしてハチクの筍までいけられていく。一つひとつの草木をとてまいじに扱う様子が印象的だ。少し枯れているものも、虫食いのあるものも、同じようにだいに扱われる。その手には迷いが無い。適当な長さでさくつと切り、藁を束ねてつくった「こみわら」という花留に、すつとさしこんでいく。

できあがったものは、気品があつて、みずみずしくて、それこそ美しい。ヒノキの葉の流れがうねるようで、風を記憶しているみたいだと思った。自然を素材として美しく造形したというよりも、それまで見えていなかった自然の造形に目を向けさせられた気がした。

珠寶さんにお話をうかがうと、自然のなかに生えている草木を見て、その姿にはつとしたこと、自分が感化されたものを表現するのだという。まさに抽出であり「―」の表現だ。

「それぞれの草木が持っている天然の姿を生かして、立ち伸びる性質のものは天を臨むような姿に、また横に靡きしだれる枝はそのような出生の姿を尊重する」(珠寶『造化自然——銀閣慈照寺の花』二〇一三年)

険しい場所に生えている草木の方が、中身がぎゅつと詰まって密度が高く、ユニークな枝ぶりをしていくものが多い。いつぼう、ぬくぬくと育った木は、やつぱりぽつと生えていることが多いというからおもしろい。だからたいていは、険しい岩山に草木を探しに行くのだそうだ。

自然の美しさ。それを言葉で表現するのはむずかしい。雄大、壮大、崇高。ほかは、息を飲むような、えもいわれぬ、筆舌に尽くしがたい、絵にも描けない、となってしまう。わたしたちにとって美しい自然とは、どうやら、とにかく大きくて、言葉や絵では表現しきれないようなもの、ということらしい。

体験として考えると、自然の美しさは、自分のちっぽけさを感じることに

隣りあわせのような気がする。

たとえば、ふとした瞬間に見上げる夜空。たくさんの星が鮮やかに見えるときほど、宇宙はなんて広くて、自分はなんてちっぽけなんでしょうと思う。

それは、自分の存在価値を否定するようなネガティブな感情ではない。自分の力がまるでおよばない大きな存在があり、自分はそのわずかな一部分であること。むしろちっぽけであることが、なんだかうれしくて、心底ほっとする③ような、幸福な非力感だ。

ふだんわたしたちは、目や耳などの感覚器官を通し、まわりの環境からつねに情報を読みとろうとする。それをもとに行動を選択するためだ。言葉を手に入れた人間は、目に入るものをつねに言葉でラベルづけすることで、その情報を効率的に処理し、伝達できるようにした。

でも、降ってきそうな星空は、ただの「星空」として分類できない。木霊が棲んでいそうな苔むしたスギの巨木は、ただの「木」として分類できない。ラベルづけできないもの、情報化できないもの、つまり自分の既成概念をはるかに超えたものに、わたしたちは感服し、自然の美しさを感じるのだから。

自然と人工——本来は線引きできないものではない。人間も動物であり、自然の一部だからだ。でも、それを対比的なものとして感じてしまうのは、ほんとうの美しい自然が、そうして人知を超えたものという感覚があるからなのかもしれない。

写真家の島山直哉さんが『出来事と写真』(大竹昭子との共著、二〇一六年)でおっしゃっているように「自然とは、人間の原理を超えて現象しているもの」だとすれば、そのことを強く感じさせられるものに、美や畏れを感じるのだから。

珠寶さんは、お花をいけると、いつも緊張しているそうだ。でもそれは、人に対しての緊張ではない。大自然とか、かみさまとか、「もつと上の方のもの」に対しての緊張なのだという。

お献花の予定が決まれば、一年前からでも観客や会場をイメージして準備をする。でも当日、座った瞬間に、無になる。からっぽにして「考えない」。頭で考えてしまうと、これまでの経験の範囲でしかイメージできないからだという。

表現をする側も、いったん無になることで、自分を超える表現に挑む。それは「人間の原理」を超える部分を追求するということなのかもしれない。

(齋藤 亜矢「ルビンのツボ」による)

*をつけた語句のへ注V

エッセンス——物事の重要な部分。本質。

クレール——スイスの画家。

珠寶——著名な華道家。

問一 本文中に「思わず自分の背筋も伸びる。」とありますが、筆者がこのようになった理由を説明したものととして、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 珠寶さんが献花に礼儀正しく臨む姿を見て、気持ちちが和らいだから。
- イ 珠寶さんの献花が始まるのに、場が騒がしかったことを恥じたから。
- ウ 珠寶さんの一札を機に場の雰囲気が変わり、自分も緊張を感じたから。
- エ 珠寶さんの一札で空気がひきしまることに、気味悪さを覚えたから。

問二 本文中に「おもしろい。」とありますが、次の文は、筆者がこのように感じた理由について説明したものです。□に入る適切な表現を考えて、十字以内で答えなさい。

珠寶さんの話を聞いて、それぞれの草木が、□をして
いるということに心が引かれたから。

問三 本文中に「幸福な非力感」③とありますが、次の対話は、この表現について話し合ったものです。□ A □ にあてはまる言葉を十三文字で、□ B □ にあてはまる言葉を四字で、それぞれ本文中からそのまま抜き出して答えなさい。

〈Xさん〉 どうして筆者は、ちっぽけであることを「幸福な非力感」と表現したのかな。

〈Yさん〉 ここでの「非力」とは、自然に対して、□ A □
を意味していると思うけれど、筆者が感じている「非力感」というのは、自分の存在価値を否定するようなネガティブな感情ではないと述べているね。

〈Xさん〉 そうだね。筆者は、自分の既成概念をはるかに超えたものに感服し、そのような自然に□ B □を感じると述べているね。だから、自然に対して謙虚に向き合う気持ちを含めて、自分のちっぽけさを感じることを「非力感」と表現したのかもしれないね。

〈Yさん〉 自然の雄大さや美しさを感じることはできるのは、自分がちっぽけだからなんだね。そのちっぽけな自分が、大きな存在である自然の一部分になっている。そのことを幸福だと感じたから、筆者は「幸福な非力感」と表現したのだろうね。

問四 本文中に「対比的なものとして感じてしまう」④とありますが、「自然と人工」をそのように感じてしまうのはなぜだと筆者は考えていますか。最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 動物である人間は自然と一体なはずなのに、圧倒的な存在である自然を前にすると、挑んで克服しようという感覚になるから。
- イ 人間は自然からの情報をもとに行動しようとするのに、壮大な自然に対しては、情報を全く読みとれないような感覚になるから。
- ウ 人間は自然に含まれて存在しているのに、人知を超えた自然と向き合うと、自分の存在価値が否定されているような感覚になるから。
- エ 人間も自然の一部であるのに、既成概念では捉えきれない自然に接すると、人間と同じ領域にあるとは思えないという感覚になるから。

問五 本文中において、自然の美しさを表現するとはどうすることだと筆者は述べていますか。表現をする側の自然に対する向き合い方に触れながら、五十字以内で説明しなさい。

第四問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

雪のいと高う降り積りたる夕暮より、端近う、同じ心なる人二、三人ばかり、火桶を中にすゑて、物語などするほどに、暗うなりぬれど、こなたには(とてども) (部屋の端に近い所で) (気の合った人)

火もともさぬに、おほかたの雪の光、いと白う見えたるに、火箸して灰など(あたり二帯) (おもしろい)

かきすさみて、あはれなるもをかきしも、言ひ合はせたるこそをかきけれ。(おもしろい)

なくかきながら。(おもしろい) (枕草子)による

*をつけた語句のへ注V

火箸——火がついた炭を挟むための金属製の箸。

問一 本文中の「すゑて」を現代仮名遣いに改めなさい。

問二 次の対話は、この文章について話し合ったものです。あとの(一)、(二)の問いに答えなさい。

〈Xさん〉 この文章は、描かれている情景が目には浮かぶようだね。

〈Yさん〉 そうだね。「暗うなりぬれど、こなたには火もともさぬに、おほかたの雪の光、いと白う見えたる」という描写では、

A が対比されて表現されていると感じたよ。

〈Xさん〉 それから、作者は、B はおもしろいと述べ

ているけれど、作者のその思いは、私も分かる気がするな。

〈Yさん〉 作者の感じ方と現代の私たちの感じ方に、共通するところがあるのかもしれないね。

(一) A に入る適切な表現を考えて、十五字以内で答えなさい。

(二) B にあてはまる表現として、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一人で過ごす夜に、灰をかきながら楽しかった思い出にひたること
イ 火桶から離れて部屋の端で雪を鑑賞しながら、仲間と議論すること
ウ 雪の光を味わいながら、気の合う人とさまざまな話を語り合うこと
エ 外に火をともし、何も言わずにしみじみと雪景色を眺めること

第五問

ある新聞に次のような【投書】が載りました。

【投書】

録画しながら聞くことに違和感

(高校生 17)

先日、駅前の広場で行われたイベントにおいて、バイオリンの演奏があり、多くの人が足を止めていました。そのとき、私には気

になったことがありません。

最近ではさまざまな場面で、録画しながら見たり聞いたりしている姿を見かけますが、それは本当にその場を楽しんでいるとは思いません。

【投書】を読み、録画しながら見たり聞いたりすることについて、あなたはどのようなことを考えましたか。あなたの考えと、そのように考えた理由を具体的に示して、百六十字～二百字で書きなさい。